

地域の特徴

1 勝山市の成立

明治21年（1888）の市制・町村制を経て、翌22年に江戸時代以来の袋田町・後町・郡町など三町は、武士が住んでいた所も含めて勝山町として再出発します。一方、周辺の農林業を経営の中心としていた集落は、地域ごとにまとまり平泉寺村・村岡村など9つの村に統合されました。その後、昭和6年（1931）に猪野瀬村が勝山と合併しました。1953年に「町村合併促進法」が施行され、大野郡北部でも合併の気運が高まり、翌年の昭和29年に1町8か村が合併して現在の勝山市が誕生しました。

市街地は九頭竜川によって形成された河岸段丘上に立地しています。それ以外の地区は、九頭竜川に流れ込む支流によって形成された河岸段丘上に、集落が形成されている例が多いようです。また、背後の山々と一体となって形成された集落も見られます。このように勝山市は地区により地形に特色が見られますが、特に北谷地区は山間部に位置し山村集落を形成しています。



現在の勝山市を構成する 10 地区

2 勝山地区



元禄勝山町絵図

勝山地区は、九頭竜川に沿って形成された河岸段丘上にあります。段丘崖や高低差をつなぐ坂によって特徴的な市街地景観をつくり出しています。

この地区からは、発掘調査により縄文時代から弥生時代の土器がさらに芳野町から弥生時代終末期の竪穴住居跡が発見されました。

安土・桃山時代のころ、柴田勝安の「勝山城（袋田城）」築城によって町が形成されはじめ、その後領主交代が続き、元禄4年（1691）に入部した小笠原氏の時代に城下町ができあがりました。城下町は、「七里壁」と呼ばれる段丘崖を巧みに取り込み形成されました。上位の段丘面には城郭と「家中」と呼ばれた武家屋敷が設けられ、下位の段丘面には寺社や町家が立ち並んでいました。5つの坂が上位の段丘面と下位の段丘面をつないでいました。このような特徴的な町並み景観が評価され、令和元年（2019）日本遺産に認定されました。

江戸時代は社会が安定し交通網も整備され、経済も発展して江戸・大坂・京都の三都を中心に都市が発達しました。各都市との往来が活発になり、こうして城下勝山にも俳諧など新しい町人文化が生まれました。現在も続く勝山左義長や年の市など年中行事も年々盛んになっていきました。

近代に入るとたばこ産業や繊維産業が発達し、勝山の基幹産業になりました。機業が次々と操業を始め、今でも当時からの機業場が残っています。かつて機業場であった建物が「はたや記念館ゆめおーれ勝山」として生まれ変わり、現在博物館として活用されています。当時の面影を残す町屋が本町筋を中心に残り、歴史を感じる町並み景観をかもしだしています。

（テーマ：河岸段丘の地形を活かした城下町の町並み、近世の町人文化から発展した祭り・年中行事、繊維など近代産業の発展、近代建築と文化の集積）

3 猪野瀬地区



文字が記された須恵器
(三谷遺跡出土)



泰澄母の供養塔
(旭町毛屋)

4 平泉寺地区



空からみた平泉寺

猪野瀬地区では、奈良・平安時代には北市遺跡に代表されるように、大きな集落が出現しました。この当時、越前国大野郡に含まれる「毛屋郷」がこの地区一帯に広がっていたと考えられています。また、白山信仰を開いた泰澄の母(伊野姫)の出生地と伝えられ、白山平泉寺との深い関連があったことが推測されます。大師山の山頂近くにある太子堂には、泰澄大師像が祀られています。

近世以降は、若猪野に郡上藩(現在の岐阜県郡上市八幡町)の陣屋(代官所)が設けられました。

昭和62年(1987)、民間により建設された大師山西麓の越前大仏や、平成4年(1992)に開館した勝山城博物館の現代建築は、今後の活用が見込まれる新しい拠点となっています。また、河岸段丘の地形・環境を活かした農業がこの地区の特徴となっています。現在は勝山水菜や若猪野メロン等、勝山市を代表する特産品を生産し、野菜や花の収穫体験を通して地域住民の交流が積極的に行われています。

(テーマ:白山・平泉寺とのつながりと自然地形(大師山)、郡上藩の代官所、歴史をつくる現代建築(勝山城博物館・越前大仏)、地形と農業(勝山水菜・メロン))

平泉寺地区は、苔・杉木立・菩提林・弁ヶ滝などの特徴的な自然に恵まれています。中世の石造物が密集する平泉寺墓地、平泉寺と白山をつなぐ白山禅定道(越前禅定道)、大矢谷白山神社、平泉寺金山跡などの文化財が多数あります。その中でも、国史跡に指定されている白山平泉寺旧境内は、平泉寺白山神社を核とし面積約200haに及び、平泉寺地区の歴史文化の中心です。中世には48社、36堂、6千坊が存在し、全国屈指の「中世宗教都市」として繁栄しました。現在、史跡内では発掘調査や史跡整備が進められ、その歴史が少しずつ明らか



発掘された石畳道



白山平泉寺歴史探遊館
まほろば

かになっています。白山平泉寺をつくり出した石畳道や石垣など、石を使った技術は一乗谷へ伝わり、戦国大名の朝倉氏による城下町形成に活かされたと考えられています。史跡のガイダンス施設である「白山平泉寺歴史探遊館まほろば」は、来訪者の拠点として最新の情報を発信しています。なお、白山平泉寺旧境内や出土品、そして石造物などは令和元年(2019)、日本遺産に認定されました。

また、平泉寺地区はなだらかな斜面に集落が形成され、集落内の道に沿って石垣が築かれています。なだらかな斜面に集落が形成されて集落内の道に沿って石垣が築かれています。周辺の山並みを背景として田園風景が連続しており、自然環境と人びとの営みが一体となった集落景観が形成されています。平泉寺区では地域住民により、平泉寺白山神社境内を中心とした歴史的環境が守られています。

(テーマ：白山禅定道、国史跡白山平泉寺と日本遺産、大工技術と建造物(寺社・民家))

5 村岡地区



村岡山

村岡地区は、九頭竜川に流れ込む支流に沿った山裾に集落が形成されています。滝波川、浄土寺川、暮見川、これら河川の自然豊かな水辺環境と、長尾山、村岡山など里山環境にも恵まれています。滝波付近には、縄文時代の遺跡が多く分布しており、昔から人びとが住む地域であったことがわかります。

戦国時代には、村岡山が一向一揆勢の拠点となり、山城が築かれて、平泉寺との決戦の場となりました。そしてこの戦いに一向一揆勢が白山平泉寺に勝ったことにより、この山は「勝ち山」と呼ばれ、「勝山」の地名の由来になったといわれています。村岡山は、地区の象徴として住民により大切にされており、地域で登山道の整備を行うとともに、



滝波お面さん祭り

毎年8月には「ちょうちん登山」を行っています。毎年2月11日、滝波区では「滝波お面さん祭り」が行われます。江戸の前期から続けられ3つのお面のお開帳と、18世紀初期から始められたと思われる烏帽子着（名替え）祝いの2つの行事から成り立っています。

また、長尾山には、県立恐竜博物館及び長尾山総合公園が整備され、福井の恐竜化石を発信する拠点となっており、全国から多くの見学者が訪れています。なお、化石と化石が発見された発掘現場は、平成29年（2017）に国天然記念物 勝山恐竜化石群及び産地として指定されました。

（テーマ：縄文時代からはじまる自然と共生する暮らし、一向一揆の拠点・勝山のはじまり、恐竜の発信(恐竜博物館)）

6 北谷地区



ミチノクフクジュソウ

北谷地区は広大な面積を有しますが、そのほとんどが山地で、県内でも有数の多雪地帯でもあります。しかし豊かな自然環境に恵まれています。中世には、河合、六呂師、中尾、木根橋、小原、谷、中野俣、杉山、そして横倉（野向地区）をあわせて「七山家」と呼ばれていました。中世に平泉寺との戦いにおいて主力となったのはこの七山家です。当地には柴田義宣・勝安と戦った谷城跡などの遺跡や、ここで討ち死にした柴田義宣の五輪塔があります。

木根橋にあるミチノクフクジュソウ自生地では、白山麓はくさんろくの自然環境の保護・整備等に取り組む小原ECOプロジェクトが中心となり、村岡小学校と保全活動を毎年行っています。また、日本最大の恐竜化石を産出する1億2,000万年前の地層「手取層群北谷層」が露出しており、多数の化石が発掘されてきました。現在、杉山の化石発掘現場は野外恐竜博物館として見学することができます。

その他、この地区は石川県白山市白峰へ通じる



谷のはやし込み

道沿いに発展した地区です。この地域には古くより牛首（石川県白山市白峰）から出作りで定着した人が多いため、その子孫も白峰の浄土真宗寺院の門徒を引き継いでいます。当地区には勝山と加賀との往来拠点として発展した農山村文化が今も色濃く残っています。例えば、地区の古い歴史を物語る家並み、白山麓の豪雪地帯に特徴的な大壁造（おおかべづくり）の民家、谷のお面さん祭り、はやし込みに代表される民俗行事、食文化、民具などです。勝山と加賀との往来拠点として発展した農山村文化が色濃く残っています。

北谷町コミュニティセンターにある山の駅「よろっさ」は、地元住民によるNPO法人きただに村が指定管理者として管理・運営し、鯖なすの熟れ鮎し等地元特産品を生産・販売しています。また、北谷の歴史や自然環境を活かした教育を行っているかつやま子どもの村小学校・中学校により、旧北谷郵便局が道具博物館として活用されています。

（テーマ：日本最大の恐竜化石発掘地、加賀牛首との往来拠点として発展した農山村、越前白山麓の豪雪地帯の暮らし）

7 野向地区



越戸峠の石龕

野向地区は、勝山と加賀新保を結ぶ大日峠の入口にあります。良質の粘土が産出され、竜谷には平安時代に須恵器を生産していた窯跡が発見されています。竜谷の須恵器は、北市遺跡など市域の遺跡からも出土しています。また、江戸時代後期に、勝山地区の国泰寺や尊光寺の瓦を焼いた記録も残っています。

越戸峠こえとには「永禄四年」（1561）の銘を持つ笏谷石製の石龕せきがんがあり、この時代の石造物として大変貴重なものです。

蓮如伝説等に関係した史跡が多くあるのも特徴で、北野津又にはお霊屋跡たまやがあり、その他箸杉・御膳水かわかすの・不乾池・蓮如清水・五三の松等があります。同



句碑紅梅塚

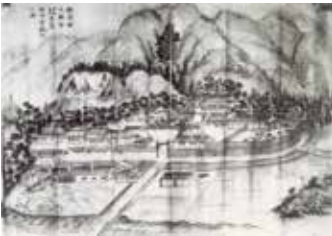
地区には一向一揆の拠点となった野津又城跡があります。

竜谷には江戸時代の中・後期に大庄屋を勤めた比良野家があります。当家には、勝山藩主が幾度か訪れており、当時の座敷や長屋門が今も残っています。幕末から明治にかけて活躍した比良野^{きょうんぼう}帰雲坊は、美濃派の俳諧に親しみ、他国の俳人とも交わって、竜谷で紅梅吟社をつくっています。彼の建てた句碑紅梅塚周辺は、明治時代になって龍谷公園として整備され、市の名勝に指定されています。

NPO法人まちづくりのむきの会により運営される「のむき風の郷」では、地元農産物等や、エゴマ栽培とエゴマの油を主とする特産品の開発・販売をしています。

(テーマ：須恵器と瓦の生産、加賀新保との往来、蓮如上人の心が宿る地域と野津又城、豪農と農村文化(比良野家・食))

8 荒土地区



堀名銀山図



佐羅宮があった現在の
伊波の白山神社

荒土地区は、山裾の平地に田園が広がり、その東に目を移すとその先には白山連峰のダイナミックなパノラマも眺望でき、美しい自然風景が広がります。

この地区には鉱山があり、堀名銀山は、安政6年(1859)から本格的な採掘が幕府の手で行われ、良質の銀鉱石を産出しました。現在も当時の面影を残す鉱山の入口跡があります。^{たちばなのあけみ}橘曙覧がここを訪れて、銀山で働く人びとなどを歌に詠みました。時を同じくして、堀名石灰山の採掘も行われました。採掘は、明治の近代化とともに盛んとなり、第二次世界大戦時には軍需工場となって、最盛期をむかえました。

堀名銀山近くにある壇ヶ城は、戦国時代に一向一揆を率いた嶋田将監^{しょうげん}が立て籠もり、白山平泉寺を攻撃する拠点となりました。また、かつて交易が行われた場所であったといわれる市姫神社や、平

泉寺ゆかりの大屋敷、佐羅堂、大門といった地名が残っています。

現在、地区では、昔ながらの炭焼き体験や新たな特産品としてのウドの栽培等、農村文化の歴史を活かしながら新たな文化や生業の創造を試みています。

(テーマ：鉱山のまちとしての発展、一向一揆の山城壇ヶ城、農村文化(炭焼き・ウド))

9 北郷地区



畑ヶ塚



鷲ヶ岳から望む
北郷地区

北郷地区は九頭竜川や岩屋川等の豊かな水辺環境を活かして、山裾に農村が形成されています。北郷地区は交通の要所であり、その中でも小舟渡は、福井と勝山をつなぐ九頭竜川の重要な渡し場でした。

岩屋は自然が豊かで、現在は無住になっている岩屋観音、岩屋の大杉、岩窟などで知られています。泰澄や道元も訪れたと伝えられる霊場でもあります。南北朝時代の伊知地古戦場は『太平記』にも記述があり、新田義貞の四天王の一人、畑時能が斯波高経の大軍と戦って戦死したところです。伊知地には畑時能を弔う畑ヶ塚があり、毎年10月25日に追悼の例祭を行っています。

旧木下家住宅は、江戸時代に庄屋を勤めた豪農の住宅です。建物は江戸時代19世紀の初期に作られ、その際に使用された部材、祝品などを書き上げた普請帳も残ります。こうした点が評価され平成22年(2010)に国指定重要文化財となり、地元を中心に保存と活用が進められています。

また、桧曽谷(新町)や坂東島などにはかつて鉱山がありました。前者は安土・桃山時代より北袋銀山として栄え、新町は鉱山の採掘に従事する人びとが集まってできた村です。坂東島鉱山は金・銀・銅・鉛等を産出し、明治後期には三菱合資会社はその規模を広げました。

なお、地元では九頭竜川の鮎のブランド化に取り組んでいます。

(テーマ：自然と宗教空間(岩屋観音)、古戦場、江戸時代の庄屋屋敷旧木下家住宅、北袋銀山と坂東島鉱山)

10 鹿谷地区



遅羽側から見た赤岩の絶景



志田神田遺跡から
発見された布送具

鹿谷地区は九頭竜左岸に位置し、中世の白山平泉寺と一乗谷を結ぶ安波賀街道や、大野方面との峠道などがあり、古くから往来の盛んな地域です。近代に入ると大正時代(1912~26)には京都電灯越前電気鉄道(現えちぜん鉄道)が通り、現在は中部縦貫自動車道の勝山インターチェンジがあります(写真には大正頃の越鉄線路が見える)。この開発に伴い、発掘調査を行ったところ縄文時代から江戸時代までの当時の人々のいとなみの様子が垣間見られる大きな発見につながりました。特に、弥生時代中期に使用されていたといわれる木製の機織り具である布送具が見つかったことです。これは、現在のところ、県内で唯一の発見事例になります。

その他に、縄文時代の本郷遺跡をはじめ、^{ほっさか}発坂や志田には弥生時代や平安時代の遺跡が発掘されています。鳴田将監や朝倉景鏡^{かけあきら}の城といわれる西光寺(保田)城は、白山平泉寺や一向一揆の歴史を考える上で重要な文化財です。江戸時代初期のころは松平大野藩5万石の支配を受けていましたが、天和2年(1682)に4万石に減らされました。そのため一時保田村に1万石の領地を管理する代官所が設けられました。享保5年(1720)に鯖江藩が成立すると、当地域の6か村がその藩領となり明治を迎えました。昔ながらの農村文化が現在まで伝えられており、ござぼうしの産地として知られていました。なお、毎年2月に開催される鹿谷町雪まつりは、地域をあげての行事となっています。

(盛んな往来、鯖江藩支配の名残り、農村文化(ござぼうしなど)、雪と共生する文化)

11 遅羽地区



三室山



配石遺構



山内淡月頌徳碑



勝山駅舎



観音さまのおすすめ

遅羽地区は九頭竜川の左岸に位置します。三室山は、縄文時代の三室遺跡、古代祭祀遺跡、一向一揆時代の三室山城として地区のシンボルになっています。また、山の麓に縄文時代に作られたこぶし大の大きさを測る川原石を用いて、円形状におそらく配石した遺構が見つかったことは大きな発見でした。

これに加えて、^{はこ}笥の渡しや^{うのしま}鵜島の渡し、^{ひしま}比島の渡し、^{たんげつどう}淡月道や赤岩トンネル、勝山駅など、交通に関する記念物等も多数あります。カタクリの群生地であるバンビラインの里山自然環境は、地域で大切に守られています。

えちぜん鉄道勝山駅は、勝山市の玄関口ともなり、駅舎は大正時代に作られたものがそのまま残っていることが評価され、国の登録文化財になっています。駅前には、ふるさと茶屋「縄文の里」が地区の住民を中心に運営されており、地元で親しまれてきた伝承料理が提供されています。

遅羽まちづくり会館内には、縄文遺跡等資料室が設置され、三室遺跡を中心に市内の縄文遺跡等から出土した遺物が見学できます。また、三室小学校では「原始運動会」が行われるなど、地域の中で遺跡を活用する取組が積極的に行われています。

2月20日、遅羽町北山で「観音様のおすすめ」行事が行われます。区に祀られている十一面観音に五穀豊穰を祈り、その徳を区民に分ち与えるために行われるものです。子供達が「かんのんさまのおすすめ おすすめ」と家々をめぐり歩き米を集めて回ります。米はおかゆにされ区民たちが食べあいます。

(三室遺跡、バンビラインなどの里山環境、勝山の玄関口えちぜん鉄道勝山駅舎)